

地震で作られた地質景観-中国・重慶小南海地震堰止湖遺跡

＜雷 興 林＞

堰止湖は地殻変動や火山による土石流などによってせき止められ、生じた凹地に水が溜ってできた湖沼である。日本には火山活動によって形成された堰止湖が沢山存在している。裏磐梯湖沼群の桧原湖、小野川湖、秋元湖などは明治21年(1888)磐梯山の爆発時に生じた土石流が吾妻連峰から流れ出る川や沢をせき止めて形成したものである。日光国立公園にも火山活動起因の堰止湖が数多くある。中尾瀬沼は燧ヶ岳火山活動による堰止湖、菅沼と丸沼は白根山火山活動による堰止湖、中禅寺湖は男体山火山活動による堰止湖、そして湯ノ湖は三ッ岳火山活動による堰止湖である。

地震堰止湖は地震が原因で発生した山崩れや土石流などによって形成された堰止湖を指す。地震大国、中国には数多くの地震堰止湖が存在するが、その中でも、地震の脅威を生々しく伝えている地震遺跡の名所ともなっている。中国重慶市黔江県にある小南海地震堰止湖遺跡は特に珍しい。小南海地震堰止湖遺跡は現在“重慶小南海国家地質公園”と名づけられて中国のジオパークに認定され、観光名所となっている。



上図：地震堰止湖-小南海のパノラマ展望。右端に急崖と崩落土石流で作られた堤防が見える。

下図：下流から臨んだ“ダム”の姿。右側に急崖とその下に作られた凹地が見られ、土石流で作られた堤防は全長1,170メートルにも及ぶ。



崩落断崖、地山の堆積岩でほぼ水平の地層になっている。



崩落断崖の側面写真。断崖の下が凹地になっていて、手前の民家の裏には池がある。



堤防上から断崖をみた風景



崩落体の上部からの鳥瞰



怪岩・巨岩が立ち乱れている堤防上の風景



上図：巨岩の隙間はとうもろこしやイモ類の畑になっている。
右図：天然“ダム”は本当のダムとして利用されている。

清の咸豊6年(1856)に発生した大地震(M6・1/4)で発生した山崩れによって形成された小南海(内陸の人々は昔から湖のことを“海”或いは“海子(海の子)”と呼んでいる)は標高が370m、面積30km²もある。中国において最も状態良く保存された地震堰止湖である。この河川沿いの湖が堰止湖であることは一目瞭然である。直立な断崖、断崖下部にある凹地と池、長さ1,170m高さ67.5mにも及ぶ巨岩が立ち乱れている天然堤防、これらはすべて地震の脅威を物語っている。この地震及びそれに伴う地質災害に関して数多くの古文記載が残されている。

同治二年「増修西陽直隶州総誌」によれば、当時川谷沿いに土家族の村があり三百戸余りの住民が住んでいたが、突然できた湖の底に永遠に眠ることになった。最近の水中調査により崩壊した寺や住居の壁や屋根などが確認された。

